

阪神淡路大震災の経験にみる社会的弱者の心の支援

市川 明日美、下村 麻美、福本 法子、青野 咲紀子、磯嶋 千明、入枝 司
内田 友丈、尾井 一貴、大槻 篤史、大山 ゆかり、桑波田 真織、妹尾 彩香
高木 星尚、高橋 俊博、花澤 翔、福田 倫子、山野 優希、和田 奈都美

はじめに

私たちのゼミでは発展途上国の国際開発、国際協力について学んでいる。その中で、途上国の貧困問題において社会的弱者に物の支援をするばかりでなく、自立のための心の支援をすることも重要であると学んだ。心の支援は、先日の東日本大震災で被害に遭い社会的弱者となった人々の復興後の地域社会の繋がりを再び築いていく際にも、同様に必要となってくる。

そこで、東日本大震災という大きな災害が起きた年であり、同じ国内でこのような問題に直面している現在、改めて心の支援のあり方について考え、今後の国際開発、国際協力の勉強に生かしていきたいと思い、地震をテーマにした今回の研修を行うことに決めた。実際に東北を訪れるという案も出る中、現在私たちが住む関西地区という身近な地域にて起きた1995年の阪神淡路大震災における心の支援の面での経験を他の地域でどのように生かしているのかを知りたいという結論に至った。そしてそれらについて学ぶのにふさわしい施設として、国際協力機構 JICA 兵庫と人と防災未来センターを訪問することにした。

研修を実施するにあたり、ゼミの時間を利用して事前学習を行った。今回訪問することになった JICA 兵庫と人と防災未来センターそれぞれの活動内容、また、政府や民間、シンクタンクによる復興プランを各グループに分かれて調べ、発表を行った。また、訪問先への質問を皆で考え、事前に相手方と連絡を取り合い、研修に臨んだ。

1日目には JICA 兵庫を訪問した。職員の平野潤一さんに実際に中国で行われている「四川大地震復興支援～こころのケア人材育成プロジェクト」についてのお話を伺った。2日目には人と防災未来センターを訪問し、阪神淡路大震災の被災者の方に震災

での経験や教訓についてのお話を伺った。また、施設見学も行い、復興までの道のりや多くの人々の体験談、数多くの展示品を見てきた。

そこで学んだことや考えたことについて報告する。

JICA で学んだ心の支援の重要性

研修1日目に訪問した JICA 兵庫では、「四川大地震復興支援～こころのケア人材育成プロジェクト」のお話を伺った。2008年5月12日に発生した四川大地震では、死者約9万人、負傷者約37万人、行方不明者約1万8000人の方々が被害に遭ったと言われている。

震災後、被災地ではインフラ整備などを中心に震災復興事業が着々と進められているが、いまだ多くの被災者が震災に関する心の傷を抱え、うつやアルコール依存症、自殺、外傷後ストレス障害等の報告が後を立たないほど深刻化している。今後より多くの被災者への精神保健・心理社会支援の充実が求められる中、JICA では日本で起きた阪神淡路大震災での経験を生かしソフト面での震災復興に重点を置いた支援を行うためにこころのケア人材育成プロジェクトを開始した。

このプロジェクトでは、被災地におけるこころのケア活動従事者育成やこころのケア活動モデルの確立等を通じ、地域に根ざした適切かつ持続的なケア実施体制が整備されることを目標としている。そのため、被災者に対する一時的な支援ではなく5年間にわたる長期的な支援を目指している。

また、JICA ではこころのケアプロジェクトに携わる現地の人々の能力の向上や自助努力を支えることを重視しているため、日本人専門家による直接支援は行わず、現場で活躍している人々の体制整備や人材育成等に焦点を置いた支援を行っている。そして、心のケアを行う際、いかに現地のニーズに合わ

ることができるかということや、おしつけではなく寄り添い見守るということを重要視しているため、被災者同士がお互いの悩みを共有し分かち合うための交流の場所を設けたり、被災者のニーズや本音を引き出すための食事を開催したりしている。

また、今回のプロジェクトを通して、日本と中国の間の相互理解の重要性を改めて実感することとなったため、プロジェクトをきっかけに日中間により強い絆を築くことが今後の目標となる。そして将来第三国で震災が起きた際、日本と中国が互いに協力し支援することができるように自分たちの震災経験を語り継ぎ、震災経験での知識を生かした復興支援対策を今後も試行錯誤し続けなければならない、と指摘された。

今回 JICA 兵庫でお話を伺うことにより、震災復興は改めて難しいと問題であると痛感した。建物よりも人の心が震災前の状態に戻るには時間がかかり、1人では解決することができない。また、1人1人に合わせたケアだけでなく、震災にあった人が皆で心の復興をしなければならない。そして、心のケアにおいて支援する側は押し付けではなく、現地に寄り添い見守るということが何よりも大切であることを改めて学ぶことができた。

これは斎藤ゼミでこれまで私たちが学んできた「途上国への自立支援の際に大切にすべき点」と似ている。先進国の基準で貧困を判断するのではなく、途上国が支援を必要としているかいないか、必要としているのであればどのような支援を必要としているのかを見極め、草の根レベルの自立支援を行っていくことが重要である。

まずは、こちら側のアクションを起こす前に相手



写真1 JICA 兵庫にて 中央、職員の平野さん

の気持ち、ニーズを考えることの重要性、またその地域に合った支援やケアを行っていくことが人々の持続的な生活を送ることができる第一歩であると感じた。

被災体験談から考える防災・減災意識

研修二日目には、阪神淡路大震災記念人と防災未来センターを訪問した。1995年1月17日の震災は、死者6,434名、行方不明者3名、経済損失9.9兆円という大規模なものであった。

人と防災未来センターは、阪神淡路大震災に関する資料を展示、実践的な防災研究と若手防災専門家の育成、災害対応の現地支援、交流・ネットワーク、災害対策専門職員の育成、資料収集・保存で構成されている。センターの使命は、実践的な防災対策と共に生きる素晴らしさを世界に発信することである。

まず初めに、震災・防災学習プログラムとして語り部ボランティアの秦詩子さんから震災時の体験談を話して頂いた。「私は、当時東灘区に住んでいました。突然ドスンという地響きとともにガラス戸や家具が飛び、家の中がぐちゃぐちゃになりました。幸い息子は家の外にいて助かった為、遺体救出にあたりました。あとになって息子から、道路に死体が並ぶという悲惨な状況を目の当たりにしたと聞きました。震災以来、私や家族はあの時自分がこうしていたら亡くなった人が助かっていたのではないかと後悔がいつまでも残っています。見えない部分が中々復興出来ないでいて、現在も毎年1月になると震災当時の記憶を鮮明に思い出します。

震災後、私たちは公園で生活するようになり、近所の方と協力して避難所を自ら運営するようになりました。避難所の仲間たちとの間で「一人になんところね」という合言葉がとても心の支えになっていました。当時は必死になって動いていましたので、大丈夫かどうかを聞かれても「大丈夫」という言葉が口癖になっていました。しかし、それは今考えると PTSD になっていたのだと思います。

ボランティアの学生が避難所に来る機会がありましたが、私や仲間たちはボランティアに頼らず、まず自発的に動き、出来ない所はボランティアの学生にお願いするという姿勢で避難所を運営していまし

た。最終的に学生の方から「僕たちの方が勉強になりました」と言って感謝されてとても嬉しかったです。私はボランティアの学生のこの言葉でとても生きがいを感じ、それ以来感謝の気持ちが体から湧くようになり、自分が生かされていることに感謝するようになりました。」

以上のことを泣きながら話してくださり、今も震災の悲惨さが被災者のこころに深く残っていることを痛感した。秦さんの様に、支えてくれる人たちが存在し、気持ちを吐きだすぬくもりのある場所があったことが心の支えになっていたようだ。

今回の話を聞いて、被災者のこころのケアには、仲間がいる、家族がいるといった、人の支えが軸になることを学んだ。また、避難所での経験や、学生ボランティアからの言葉から、自分の存在意義を見出すことが出来たことも、自立への大きな一歩であるということが分かった。

次に、震災追体験フロアにおいて1.17シアターでは大きなスクリーンからの映像と音響で兵庫県各地の地震破壊状況を床の微動と共に体感した。ビルや家が倒れる様子がリアルに再現されており、阪神淡路大震災の被害が凄まじいものであったことが伺えた。次に、防災・減災体験フロアの災害情報ステーションでは、日本列島に存在する地震の断層や規模、警戒すべき地域を把握することが出来た。また、タッチパネルで津波がどの高さで自分の住んでいる地域を襲うのかを視覚的に意識付け、各々で防災意識を身につけることを考えて作られているコーナーも設置されていた。ここでも、ボランティアの方から個々に被災経験を語って頂くことが出来、各自で震災について深く考えさせられた。

関西では地震が起こらないだろうという意識があったが、阪神淡路大震災の様に突然地震が起こり、人々に防災・滅火知識がなかった為甚大な被害に発展した。この様に、いつどこで誰にでも突然地震が起こる可能性は十分にある。このセンターで、視覚的聴覚的に震災を疑似体験したり経験談を生かしたりする等、事前に防災・減災意識や知識を身につけることで、被害を最小限に留めていくことが出来ると感じた。

阪神淡路大震災により甚大な被害を受けた兵庫県は、現在の様に立派に復興し発展している。阪神淡



写真2 人と防災未来センターの様子

路大震災を経験した地域ならではの経験や知識や技術を生かして、東北地法太平洋沖地震の復興の支援の手助けをし、被災した東北地方が兵庫県の様に復興することが望まれる。

おわりに

今回 JICA で行っている「四川大地震復興支援～こころのケア人材育成プロジェクト」と阪神淡路大震災の被災者の方からの体験談を伺い感じた共通点は、自分たちの経験を語り継ぎ、次に生かしていくことの大切さである。JICA のプロジェクトでは、四川大地震にて被害に遭った人々の心の傷を癒すために、日本で起こった阪神淡路大震災での教訓をもとに支援を行っている。また、人と未来防災センターにて阪神淡路大震災の経験を語る方たちは、震災の恐ろしさを忘れないために、そしてもしも地震が起こった際の役に立てばと、地震を経験したことの無い人たちに対して、実際に自分たちが体験した震災の教訓を語り継いでいる。どちらも自分たちの経験をもとに行っており、形は違っても心の支援なのだと思う。

震災の恐ろしさや心に残る傷は回りしれないものだろう。神戸の町のように建物や道路などの外観はどんなに美しく復興しても、心の中ではまだ震災の恐怖を抱えている人もたくさんいるだろう。今回お話を伺った震災経験者の方も決して震災による心の傷が癒えたわけではない。しかし、語る勇気を出すことができたことは本当に素晴らしいことだと思う。そしてこの方のように自分たちの経験に目を閉ざすことなく振り返り、人に語り継いでいくことができたとき、それは本当の自立であり、支援の成功なのではないだろうか。

四川大地震の心のケア人材育成プロジェクトは現在も進行中であり、おそらくまだ完璧な結果は得られていないだろう。しかし、四川で震災を経験し日本からの支援を受けた子どもたちが、今年起きた東日本大震災の被災者に対して励ましのメッセージを届けてくれた。これはプロジェクトの成果であり、少しずつ立ち直りを見せ自立の道を歩み始めた第一歩であると思う。

そしていずれ、四川大地震の被災者はもちろん、東日本大震災の被災者、世界中の震災経験者が、震災の恐怖を乗り越え、自分たちの経験をもとに第三国への支援を行えることができればそれこそ支援の成功と言えるであろう。

また、地震大国である日本に住む私たちはいつ震災に巻き込まれてもおかしくない。もし自分自身が被災者の側になったとき冷静な行動が取れるかどうかはわからない。しかし、今まで社会的弱者の支援について学んできた私たちであるからこそ、今回の

研修で伺ったことや学んだことを少しでも生かし、率先して周囲の人たちを支えていけるようにしたい。

そして最後に、震災に限らず世界中では心の支援を必要とする問題が数多く存在している。内戦や紛争の影響で母国を捨てざるをえない人たち、社会的差別で虐げられている人たちなど多くの方が心の傷を抱えているだろう。そのような問題は、たとえ似ているように見えても国や地域によって違ってくる。しかしそんな人たちに対して、同じような経験をしながらも問題を乗り越えてきた人たちが支援の手を差し伸べることで同じように乗り越えることができ、支援の輪が広がっていくかもしれない。一つの地域で始まった支援が、日常生活で何気なく行った支援が、世界中で連鎖していき、いずれ世界中の人々が自立できる日がくることを心から願う。そのために、たとえちょっとしたことでも私たちにできる支援をこつこつと行っていきたい。